

(別紙2)

審査の結果の要旨 氏名 村上 龍

本論文は、アンリ・ベルクソンの「感性(sensibilité)」をめぐる思想についての体系的研究であり、大きく二部からなる。

第一部第一章は、ベルクソンがその「感性」をめぐる思想を初めて明確に示した晩年の著書『道徳と宗教の二源泉』(1932年)に焦点を当てる。著者は、同書のベルクソンが「感性」を「情緒性」として定義した上で、それを「低次」のものと「高次」のものに二分し、現実的な表象に付随する受動的な能力としての「低次」の感性との対比において、「高次」の感性(すなわち「知性以上」の感性)を、いまだ実現されることのなかった独自の可能性を受容しつつ、この可能性の実現に向けて知性および意志に働きかけるところの、受動的にして能動的な能力として規定していることに注目する。著者によれば、判明な多性へと展開されるであろう一性の受容として「高次」の感性を捉えるところに晩年のベルクソンの独自性があるが、この点を明らかにするために、第二章では、近年ようやく公となった初期ベルクソンの講義録を検討しつつ、「高次」の感性にかかわる思想が初期ベルクソンには欠けていることを実証的に示す。

第二部は「感性」をめぐるベルクソン独自の思想が形成された経緯を明らかにすることを目指すものであり、五つの章からなる。第三章、第四章は初期から中期にかけてのベルクソンの「持続」および「直観」概念の変遷を取り上げ、両概念がともに、一性と多性をめぐる晩年のベルクソンに固有の「感性」概念を準備するものであることを示す。第五章において著者は、ベルクソンのうちにこうした変化をもたらした機縁をプロティノスとの対決のうちに求め、一なる「知性界」から多なる「感性界」が流出する、というプロティノスの流出論を「反転」させて、「高次」の感性を持続と結びつけるところにベルクソンの独自性がある、と主張する。続く第六章、第七章では、プロティノスの流出論を「反転」させたベルクソンがカントおよびフィヒテとの対決を通して自らに固有な「直観」概念を確立する過程を再構成しつつ、そこに晩年の「感性」概念の成立基盤を読み取る。

美学が18世紀半ばに「感性の学」として成立したにもかかわらず、「感性」の問題はその後の美学の展開において等閑視されていたことを考慮するならば、本論文は現在における美学の感性論的転回の動きに棹さすものとしてまさに時宜に適ったものと言える。主題をベルクソンにおける「感性」の概念に限定するあまり、ベルクソン解釈としての拡がりには欠ける面もあるが、最近公となった講義録の検討を通して、哲学史的な文脈のうちにベルクソンを位置づける新たな試みとして高く評価できる。よって、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値すると判断する。